

二〇二一年度入学試験 A-I

京都学園中学校

国語

注意

- 問題は全部で十一ページあります。
- 「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 質問がある場合は、静かに手をあげ、教員が来るのを待ってください。
- 「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は教員の指示にしたがってください。

一 次の①～④の四字熟語の□部にそれぞれ対になる漢字を入れて完成させなさい。

- ① 一部 □A □B ② □A 往 □B 往 ③ 起 □A 回 □B ④ □A □B 音

二 次の①～④の()にあてはまる言葉を語群から選び、記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えません。

- ① 試合に負けた弟が、()と帰ってきた。
② 父の大事な車に傷つけてしまい、()する。
③ 大きな犬がつかれているところを、()しながら通る。
④ 誕生日のプレゼントを買いに行った母の帰りを、()して待つ。

語群

ア	そわそわ	イ	おろおろ	ウ	きびきび	エ	びくびく	オ	とぼとぼ
---	------	---	------	---	------	---	------	---	------

③ 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

クモは嫌きらいでも、ほとんどの人はクモの巣を見たことがあるだろう。しかし、^①いざクモの巣を探すととなるとなかなか難しい。いつ頃ごろ、どこに巣を張っていたかなどはあまり覚えていないからである。クモは一年中どこでも巣を張るわけではない。時期を逃のがせば山をいくら駆かけ巡めぐってもクモを探すことは難しい。

黄色と黒の体色をしたジョロウグモが張る巣は、9月頃から11月頃にかけて日本各地で見つけやすい。夜活動するズグロオニグモの巣は、活動時期は6月から8月頃。コガネグモの巣は7月から8月にかけて見かけることが多い。これらの成体のクモが巣を張るシーズンが分かったとしても、どの場所に巣を張るのかは別問題で、クモが成長して大きな巣を張らないと、巣を見つけ出すのはなかなか難しい。

ズグロオニグモは、橋の*欄干らんかんや橋脚きょうきゃくの下の空間によく巣を張る。その空間は昆虫こんちゆうがすいと飛んでいける風の通り道である。昆虫が飛んでくる場所に巣を張っておけば、効率よく昆虫を捕獲まができることになる。東南アジアのジャングルに行くとどこでもいつでもクモが多く巣を張っているイメージであるが、木々が密集しすぎて昆虫が飛びにくいところや、乾季かんきには巣は見つけられない。夜光灯の近くにクモが密集して巣を張っているのをよく見かける。普通ふつうは、クモはなわばりの問題もあってお互いたがに離はなれて巣を張っていることが多いことから、信じられないような光景である。しかし、昆虫は夜光灯の光を指して次から次へと飛んでくるので、夜光灯の近くに巣を張れば、たとえ密集していてもクモにとっては食料には事欠かないことになる。以前に、教授室の机の上に孵化ふか直前のジョロウグモの卵のうを置いて帰宅したことがあった。翌朝ふに出勤すると、前夜のうちに卵のうから孵化した数百匹の子グモたちが光のある窓のところに壁かべを伝って集団移動していた。昆虫と同じく光を求めての移動で、クモもちょうど昆虫の捕獲とらに¹テキてきした場所に巣を張るといっ習性を持ち合わせているものと思われる。

A日程 [A1]

クモが巣を張る立地条件として重要なことは、食料となる昆虫が活動しやすいところである。つまり、食物連鎖の成立する水辺は巣を張るのに良い条件ということになる。このように昆虫の習性を理解しながら、クモを探すことが重要である。

郊外を歩いてみるとクモの巣を見かけることはあるが、クモが巣を張っているところに遭遇することはめったにない。ところが、注意深く探していくと、地方の駅のホームで夏の夕方に電車を待っているときに、蛍光灯の近くでズグロオニグモが巣を張るところに遭ったり、雨上がりの昼間に田舎の家の縁側から、ジヨロウグモが巣を張り替えているシーンを見つかったりする。多くの人はクモに関心がないので、ホームの屋根裏でクモが巣を張っていても素通りしてしまうが、真剣にクモの巣の張り替えを見ていると、その巧妙さについて引き込まれてしまう。

ズグロオニグモは、昼間は欄干のコーナりの隙間に隠れている。夕方になると外に出てきて、風や昆虫の飛来で壊れた巣を取り集めて、それを食べる。次に、欄干に糸の先端を固定することから始まり、クモの降下や移動するときの力を利用して腹から糸を引っ張りだし、新たに巣作りを始める。巣の中心から縦糸を張ってから、横糸を順次張っていく。最後に巣の中心部の生活場所であるこしきを作って巣が出来上がるが、巣の中で粘着性があるのは横糸だけである。そして、クモは完成したこしきで頭を下に向けて獲物の飛来を待っているのである。

ジヨロウグモの場合は、毎日夜になると数時間かけて巣の半分を張り替える。つまり、巣の半分は2日に一度の張り替えとなる。巣を張る際には足場糸をあらかじめ張り、それを利用しながら、縦糸間を何度も往復しながら横糸を張る。このように、クモは種類によって特徴ある巣作りをするが、共通しているのは横糸に粘着球がついていることである。これまで、横糸の粘着球については例外を見かけたことはなかった。

40年にわたってクモの巣を見てきた私は一度だけ目を疑うケースに出くわしたことがある。沖縄から送られてきたオオジヨロウグモを大学の中庭に放した翌日のことであった。昼食から研究室に戻る途中、中庭に素晴らしく大きな巣を張っていたので近づいてみた。そのとき、「えっ！」

と目を丸くしたのである。クモの巣ではありえないことが起こっていたのだ。なんと、すべての縦系に粘着球がついていたのである。私は初めて出会う出来事なので驚くとともに、逆に嬉しくなっていた。そのとき、ちょうど通りがかった生物学の先生を誘ってみた。逆さナマズの宇宙実験で知られる大西健先生（現茨城県立医療大学教授）で、クモの巣には興味がないと思われたが、私のコウフン³を先生に強要したようなわけであった。オオジヨロウグモはどこでどう間違ったのかは知らないが「（ X ）」をしてかしていたのである。

クモが巣の中で歩いて移動するシーンや、巣から命綱^{いのちづな}を使って降下するシーンはしばしば目撃される。一方、アシダカグモのように獲物を求めて暗闇を歩く徘徊性のクモもいる。家の中ではハエトリグモが飛びはねたりするところも目撃することができる。しかし、クモが大空を飛ぶ「^③バルーニング（空中飛行）」話は空想の世界かと思われ、すぐには信じがたいものである。確かに、クモが空を飛ぶとしても、飛び立つところや飛んでいるところを目撃するのは極めて難しい。多くの人が小さなクモを認識できるのは、生まれた直後の子グモの群れやバルーニング後に着陸してしばらく経ってから木々に張ったクモの小さな巣ぐらいである。しかし、そのような巣も小さすぎて余程^{よほど}関心を持っていないと見過ごしてしまうものである。

飛行中の飛行機内でクモが捕えられたり、船の上で捕えられたりしていることは、クモが空中を飛行している証拠の一つである。東北地方では、秋になると「雪迎え」という現象が知られている。秋の小春日に、子グモが糸を出し、糸を浮力^{ふりよく}にして上昇気流に乗って空高く舞い上がるクモの飛行現象のことで、しばしば目撃されている。その後まもなくすると雪が降ることから、「雪迎え」とも言われている。

春になって卵のうから生まれたばかりの数百匹のジヨロウグモの群れは、1週間ほどの間に集団で木の枝先の方に移動する。その頃は、ちょうど春風が吹く時期でもある。クモは成長するにつれて細長くなるが、生まれたばかりでは赤みのある球のようなものである。葉の上に移動した0・5mg程度の重さの子グモは糸を出して風が吹くのを今か今かと待っている。ちょうど風が吹いた時に

A日程 [A I]

腹から出した流し糸を推進力として、子グモは風に乗って空中に飛び立つのである。子グモが糸を出して空を飛ぶなんて驚きである。その際、子グモは腹を下にして脚あしを上げて立ち、空中に何本かの糸を出して、順次飛び立っていく。そよ風によって子グモは新天地に移動し、そこで小さな巣を張って新生活を始めるのだ。

(大崎茂芳『糸を出すすごい虫たち』)

* 欄干： 人が落ちないようにつけた手すりのこと。

問一 〰〰〰部 ー ー 3 のカタカナは漢字に直し、漢字はよみがなを答えなさい。

問二 ー 部 ① 「いざクモの巣を探すとなくなかなか難しい」とありますが、「クモの巣」が見つかりにくいところを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 橋の欄干の下
- イ 東南アジアのジャングル
- ウ 駅のホームの屋根裏
- エ 田舎の家の縁側

問三 ー 部 ② 「目を疑うケース」について、

(1) 「目を疑うケース」を言いかえた言葉を本文中から二字でぬき出しなさい。

(2) 「目を疑うケース」とはどういうことを言っていますか。「くこと。」に続く形で本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問四 (X) に入る慣用句としてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 河童かわづむらの川流れ イ 猿さるも木から落ちる ウ 釈迦しやくかに説法 エ 弘法こうぼうも筆の誤り

問五 ジョロウグモとズグロオニグモについて、それぞれの巣の共通点を二つ答えなさい。

問六 —— 部 ③ 「バルーニング(空中飛行)」とありますが、子グモはどのような方法で「空中飛

行」するのですか。三十字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

女の人は口元に笑えみを浮かべたままばくを見て、

「他界たがいしました。去年の春はるです」静しずかな口調くちうで言った。頬ほおをはられたような気持ちでぼくは女の人を見た。そういえば、玄関げんかんになんの飾かざりりもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家うちにいついて、ちょうど今日は留守くすで、私もひまだったんですよ」

「えーと、あなたは、おばあさんの」

「孫まごです。三年前さんねんまえにここに引越ひっこしてきて、この家で両親りやうしんと暮くらしています」

「それであの、ミツザワ書店みつざわしやは」

「祖母そぼが伏ふせてから、ずっと閉しめています。あとを継つぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲もちかるような店みせじゃなかったし、祖母そぼの道楽みちがく①みたいなものでしたしね。今は駅えきの向むかこうに大型書店おほがたしやもできて、うちが店みせじまいしてもみなさん困こることもないでしょう」

何か、とてつもない失敗をしかしたような気になった。自分は凶悪事件の加害者で、警察にいかず被害者の家に自首しにきたような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫びしなきゃならないことがあって今日はこまできたんです」

ぼくはうつむいたまま一気にしゃべった。十六歳の夏の日。秋のはじめの決行。はじめて本読

みて夜を明かしたこと。拙い感想。三年前書きはじめた原稿。幾度も書きなおした言葉。とんでもないことになったと思った授賞式。夜襲いかかってくる不安。単行本と、それを手にして思い出したおばあさんのこと。

「本当にすみませんでした」

ぼくは財布から本の代金を取り出してソファテーブルに置き、深く頭を下げた。呆れられるか、ののしられるか、帰れと言われるか、じっと待っていると、子どものような笑い声が聞こえてきた。

驚いて顔を上げると、女の人は腰をおりまげて笑っていた。ひとしきり笑ったあとで、話し出した。

「じつはね、あなただけじゃないの。この町に住んでいた子ども何人かは、うちから本を持って帰ると思うわよ。祖母の具合が悪くなって、それで私たち、同居するために引っ越してきたんだけど、はじめてあの店を見て、私だって驚いちゃった。持ってけ泥棒って言っているような本屋じゃない。しかも祖母はずうっと本を読んでいるし。私も幾度か店番をしたことがあって、何人か、つかまえたのよ、本泥棒」女の人はまた笑い出した。「それだけじゃないの。返しにくる人も見つけたことあるの。持っていたものの、読み終えて気がとがめて、返しにきたんでしょね。まったく、図書館じゃあるまいし。こうしてお金を持って訪ねてきてくれた人も、あなただけじゃないの。祖母が生きているあいだも、何人かいたわ。じつは数年前、これこれこういう本を盗んでしまった、って。もちろん、そんな人ばかりじゃないだろうけどね、そんな人がいたのもたしかよ。あなたみたいだね」それから女の人はふとぼくを見て、

「作家になった人というのははじめてだけれど」と思いついたようにつけ足した。

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がって手招きをした。

玄関から続く廊下の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の人は塗装の剥げた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃っぽいような、甘い菓子のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あのなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですわね」

女の人とともに、店内に足を踏み入れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本——。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読んでましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのこともあるけど、時代小説のこともあったし、あるとき私がおざきこんだら、UFOは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなってからは、自分の読みたい本ばかり。チュウモンして、片っ端から読んで。売り物なのにな」

女の人は積み上げられた本の表紙を、そっと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へもいったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれない

ですよね」

それを言うなら子どもどものころのぼくにとって、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思ったけれど、口には出さなかった。そのかわり、棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた。

「おばあちゃんの本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽っちゃうんだから」
思わず言うと、女の人はまた楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸いこみ、吐き出し、だれかに読まれるのをじっと待っているかのように。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者という風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

礼を言っただけで玄関を出た。門まで見送りにきた女の人は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思っています」
とちいさな声で言った。「図書館なんておこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持って行って、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っていますよ」

「そうやってほしいと、じつはさっき思っていたんです。楽しみにしています」
ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございます」
女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「そうじゃなくて。本、お買いあげください」

女の人はおかしそうに笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。店

の前に並べられた週刊誌や漫画^{まんが}、埃^{くも}で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだろう。^⑥ 世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開くのだろうから。

不釣り合いでも、煮詰^{にっ}まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書こう、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらいしの小説を書こうと、書き初^{はじ}めに向かう子どものような気分です。

顔を上げると、青い空に凧^{たこ}がひとつ浮かんでいた。

(角田光代 『ミツザワ書店』)

問一 〰〰〰部ー〰〰のカタカナは漢字に直し、漢字はよみがなを答えなさい。

問二 ——部 ① 「道楽」・⑤ 「おこがましい」の意味としてふさわしいものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「道楽」

- | | | | | | |
|---|----------|---|-----------|---|-----------|
| ア | 一生をかける仕事 | イ | その場しのぎの遊び | ウ | 趣味としての楽しみ |
| エ | 楽にかせげる商売 | | | | |

⑤ 「おこがましい」

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|---------|
| ア | もどかしい | イ | いぶかしい | ウ | つつましい | エ | さしでがましい |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|---------|

問三 — 部 ② 「柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた」とありますが、そこから読み取れる気持ちとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いかり イ 不安 ウ とまどい エ 悲しみ

問四 — 部 ③ 「秋のはじめの決行」とありますが、何をしたのでですか。答えなさい。

問五 — 部 ④ 「女の人は腰をおりまげて笑っていた」とありますが、なぜ「女の人は笑ったのですか。簡潔に説明しなさい。

問六 — 部 ⑥ 「世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開く」とありますが、それはどのようなことを指していますか。その説明文としてふさわしくなるように次の文の空欄を（ ）内の字数で本文中からぬき出してうめなさい。ただし、（ 3 ）は最初と最後の五字を答えなさい。

（ 1 三字 ）が（ 2 六字 ）を（ 3 四十字以内 ）場所にしようとしていること。

〈問題はこちらで終わりです〉

国語A-I

一 【計十六点】

① A 始 B 終 ② A 右 B 左

② A 死 B 生 ④ A 異 B 同

二 【計八点】

① オ ② イ ③ エ ④ ア

三 【計三十八点】

問一 1 適 2 しょくもつ 3 興奮

(2点×3)

問二 イ

(4点)

問三 (一) 例外

(4点)

(2) すべての縦系に粘着球がついていた(こと)

(5点)

問四 ウ

(3点)

問五 食料となる昆虫を効率よく捕獲できるところに巣を張ること。

(5点×2)

クモの巣の横系に粘着球がついていること。

(5点×2)

問六 腹から出した糸を浮力や推進力として使い、空中に飛ぶ方法。

(6点)

四 【計三十八点】

問一 1 くちよう 2 むぞうさ 3 注文

(2点×3)

問二 ① ウ ⑤ エ (3点×2)

問三 ウ (4点)

問四 ミツザワ書店で本を盗んだこと。(5点)

問五 以前に本を盗んで、今になってお金を払いに来たり、返しに来た人がほかにもたくさんいたから。(7点)

問六 1 女の人 (3点)

2 ミツザワ書店 (3点)

3 この町の人ゝれるような (4点)